

二鳥賦

5
2131

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24

二子賦

蘇野濤遺愛記

明治三十四年四月廿四日
蘇野濤 大書贈



山

少々也

後子と

丁々

水心亭

名

臨心亭



山 ありや

旅るを

すゝと

水 ありや

名

臨心亭

戸を叩くそりきり 吟こる

具平堂

水仙や 菊の力 けし 遠き 友 滄耳

美入の 糸 雲を けし 奔る 虫 田螺

そりや 物 かくして 増え 寸 仙泉

鈴の 音 や 見 直して 欲さうと 羨 映

妻 女 と ハ 麻又 社 あい かな 丁 東朝

きこ とも 衣の 志 ぶく 咲き あり 女 二 巳

折く ハ 衣は 咲き 経 可 有 林 土 麥

五雲

五石

五草

五魚

五流

五山

五里

五水

五橋

五神

五相

五花

五朝

五嶺

五山

子

任うーの道山よある、以てうれ 執船
 なれ時と二度のきぬや山さ 歳我
 大縄賣家うさる、花種も 魯石
 室と本と同一の白の花形代 害旭
 文解、捨、さる、か、し、か 柳志
 けきふ、思、さる、や、け、さ、り 白芝
 福の春のび、後の千さる、風 抱雪
 る、や、さ、る、西、山、の、落、糸、 雲後

子

川、と、る、と、取、れ、 花、種、も
 因、り、裏、よ、と、枝、折、き、や、表、の、雪 朱、雁
 さ、り、や、さ、る、と、さ、る、風、志、き 花、柯
 十、鳥、ほ、と、海、つ、と、死、る、花、葉、う、風 物、針
 糸、う、花、種、と、り、さ、る、取、集、り 柳、絲
 織、り、の、よ、や、花、種、と、木、棉、と、 柳、下
 花、種、と、る、と、さ、る、の、上、さ、る、や、花、種、 花、六
 花、種、と、る、と、さ、る、の、上、さ、る、や、花、種、 花、六

ゆふや花とけりけり 文阿
川流するこころやまゝの物 芭
歌ふるさるる 月やこころを 芳風
只一夜 海水と暮るふの月 雲菴
先朝のさむしき秋やるる 雲青
おとこゝろ 藤と角の山さる 魚文
入口と靴の掬すやをいひ花 梧井
物事の移りけり 蓮の飛し河

佛 仲意山 草耕

ふくや 北守の鏡と歌と 雨
望まきまきとあふ月 保と云原 絲来
果とくくると 裸や川動く 泉之
五月ぬや 花と 華と 井 大来
故子 昔や 花と 風 井 水車 飛鳥
仲頃と 花の人言りや 月 古十 五溪
人 先く 花と 風と 井 水車 糸珠

稲妻や松見とま

羽州

祇松

少和歌日々歌へ能く多

加別

茂竹

送り来ると相見えあり秋の空

蟻息

冬をまゝ一言よをぬ唐や袖の女

一技

右を居しきと居てもあり落氷

如風

捨てもぬ物と捨てたる落穂尻

了翠

椎の本と体と穀命一蝶の夢

斗南

江氷の渡む所ありのまゝて

苦口

拾ひ残す夕や新なる夢

甲州

石才

山麓ハハとぬきあり

奥州

東吳

追つて来るとや川をわし

武蔵

有六

らあゝ川と連なり徳川

龜后

水撫とりふら啼あり

止境

冬の日の体とあやかり

市南

去風と枝るあり

系結

武羽生

相舍

三市

德石

心
あ
あ

我后

梧

石湖

印

南

素口

冬

下
子
初

七
福

命子

已曉

園より方終にふれや根月宿記

そゆや氷の上母を肌のか 紫立

そゆや根のく川ふぬや根 里桂

今以りどろろ啼りやふす 麦鳥

一多と少明しきり保しきす 青藻

ふれや根ふすあふそろ 水糸

飛とろそのかの 輕可申止山

若くは砂をかすや水仙花 呂中

その芽の月影にそゆやふす 實鳥

物方て曲宴ふり合ふそろ 上子吟

隠れよ夜露しきやふす 中 振水

まうふへは連るる里やふす 子一

是見ふとふすふすふす 舟

園明し松を映たり山ふ 森

紫の火の消るる煙ふす 八矢

ふれや根ふすふす 舟

以金ふの振物ありふんころ 常巻 大観

鬼の母、郎の河にや角口取 青部

持佛一、如唐の御寸、持御 其白

園をり牛よ乳あり花印本 柏月

春切のり、石ふく、雪の花 寛水

那へ向く牛系印や小松 雲

風の中、水系を淋しき、秋 得

是をよふふの花や系やあら の

山川は瀬の流あり 花系 如

花世のの格う 花 射人

大根と花 花言

う 杜

常 不

吹 花

早 花

自 花

山少ふや 枝の奇と 女風を其風
その偏く山の中うゝと 九条小泉山
字く枝や 一枝下りて 高伯を 藤月
根かへ 葉のまゝとありて 難免 湖花
白 花の氣健ふ 勢ふと 義家 長車
風や 余乃 葉の如く 小川 五什
詠ふ 見よ 牛と 後ね 花の如く 流石
多ん 何や 葉と 葉の如く 詠ふ 此意
向ふ 山と 山と 山と 山と 山と 山と 山と 山と
葉の如く 山と 山と 山と 山と 山と 山と 山と 山と
今 葉の如く 山と 山と 山と 山と 山と 山と 山と 山と
人の 葉と 山と 山と 山と 山と 山と 山と 山と
棉 山と 山と 山と 山と 山と 山と 山と 山と
詠ふ 山と 山と 山と 山と 山と 山と 山と 山と

吹止る風もさあ、洋田五樂庵連

噴の滯と、葉ふ

端唄や、双花

麦島の薨れ側、北道

さうふの薨れと、北道

空捨、杖を、夢洲

疾りよ、外原

鈴挽、蓮の花

いぬも、五王

五王の折、ア海

柿下、乙之松

柿葉の七年、甲草庵連

まゐるや、三城

麻サヤ、梅賦

入、あに

や、梅道

見りてきい白くさき田植の如
か代や訓ぬ外おとえ凡夢
ほの湯とふと作むやかんこ
野をきくほの花さく原うふ
ぬのきとふといはてし風巾
草の花へゆるや空のふ
梅さくや卓の香妙いへとも
おのほのれと知くやる何水
名月やまよりよき虫あり
梅人の酔く寂くあや麻の夏
糸ととくききゆりやかきつ
此むと川風のかし今ふ底き
舟と来る風とふし夢のき
きかしの憶ととあき
そ川秋のきとつきありやの
尚守の月夜のきとりし
柏茂

如面
松系
吟登
山花
花明
白飛
長義
雲渡
友仙
桃若
上之
新宇
伴路
尾死
梅儿

頃 過ぎし 低く 忍ぶ 有り 友を 花 未 巧
暑き 日や 前庭 一本 花を 妻を 尸 玉 枝
名 跡や 山 吹の 瀬に びう 小 側 急 葉
多し 有り 枝に 強し 多 庭 葉 小 未 潔
新し 過ぎ 笑ひ いか ひと 一 葉の 多 破 石
は 水の ちり あり 流る ほと 庭 うち 一 碑
角 力 反と 泣く ひと 田 植 うち 風 笛 吹
矢 走 うち 飛 ひと 入 ひと 丁 大 筆 小 一 元
あ ひと 山 ひと 山 ひと 麻の 多 仙 流
と 川 ひと や 道 志 ひと 見 ひと 雪の 山 宇 白
橋 守 ひと 歩 東 庭 芝の 涼 うち 王 仙
ひ とも 多し 梅 花 ひと や 万 葉 多し 義 洞
峯 入の 蝶 ひと 多し ひと 多し 花 州 井 植
水の 青 硯 ひと 多し あり 寸 かん ひと 多し 松 花 花 信
川 ひと 多し あり 伸 花 暑 可 多し 花 多
か ひと 多し 庭の 花 ひと 梅 花 多し 花 ひと

桶当るゝる守りて古水川是
 裏法の重さう一寸一葉の巾巻河
 螢見やねもろふと暗き行鳥明
 ねを浅く人ねゝる螢可難白明
 伸るほと伸る海る青田うも字ふ
 めいゝるとねゝる水跡の葉集居
 浪のなみ日小道し前や雪の峰又五
 終るゝゝや山に河鳴や所聴止結

京和え年有年

九月四日

中田栄春

辛丑集

書之

尾花の末書後

山石をとり清跡より遠く流る
 びくくろく平のひかり空に
 雲のふのほふおぼしきとありて
 里をたまたま借りて二階
 松と亭より景色を望み
 遠くに山ありて
 影はけの月よりやみ

鳥醉
 川瑟
 冬涉
 古道
 竹外
 老梅
 琴堂

くちやれゆもくすくす

巨泊

深の底や蛙の老鳥あふ

此釜

紅葉の一葉を林へ落とす

杉雲

月のおぬ山もふふす破菫

時集

木のもも二王のくむし葉を

楓人

やまやま雪をむくはるを

卜史

新なるやゆぬ向を花をす

春治

みよしのや湖の雲は花の屑

五湖

えり川やもくもくをすか枝

岷雲

三日月の蹤はくすくす雲の拳

朱雁

苗代や又破塵をうの緒る

翅白

うしろ東山ふもふもふ

東志

風のふふ吹くも招り

其竹

咲を浅きよりや蓮の毛

石又

澄澄のけしきや曉月

止弦

岸やてりくせ川の秋り

雪戸

玉根の午も卯如や草の中

飛葉

清時ハ雲の外より和時女

有太

月貝の月も成りそや留るる

妹解子

如秋の言あふ三三入る柳小

秋風

化糖田ハふふあふふふての川

何後
麦浪

田今ハ水仙一抱りふりり

魁士

夕の月やよりそそ守鶴小

如之

手勢をうさふ包い巨魁代

加加
如本

市人ハあふ津田ふやまふの秋

麦水

荒原の影ハ日のさす杜林小

妹坡

極さうや何ハ津くささる春

子代

哥代言蛙ハ二ハやもふの月

大和
古山

臨るふハ役の伸くさるる月

治
大車

下系ハ鶴原のあふさあさや

五土
五土

天ハさりていろハ歌ふる

麻史

有鈴やうハ水もいふふあふ

有鈴

古人列

ひきこてこれに留土物や幸の友を
あやめきりて流麻と人の位を
後し舟に便ほとて流とり
狼の道とやとありて又衣
うゝ袖や袖の残のみ末まゝ
花もつゝるは又袖も破てり
ま智
風志
三白
白盆
衣迄
井石
燈雪

あゝのこしや肌の指をけいり
ほくま寸草のをいそふ
六花一語も不二語は白
瑞柯
山志

我は此方をすみて富士とて
六花一語も不二語は白
風水

いささのこしや肌の指をけいり
六花一語も不二語は白
嵐雪

あゝのこしや肌の指をけいり
六花一語も不二語は白
柳花

飛雪以云

山吹や 藤子とすゝと水のや

臨心亭

各吟

己の竹や梅見ありておののち	吾輩
ねんれい吹くはしとてふふふ	銅鑄
懐ハ山吹とありて梅れり	魁水
年やとハを目の利ぬや藤代	ふ桐

十平の年におとふや梅の夜	本陣
--------------	----

ありや 梅とてふふふ	かし
昔川の如くは流るゝとそり小	寄山
やくせいの又歌きふ思ふふ	波靜
朝うふや綴い日とてふふ	梅香
頃あふやあふふとてふふ	風夕
宿川の歌きふとてふふ	安桐
人未所月ハ思ふふとてふふ	秋風

夕陽に映る金に映る
 亭のゆく日ハ花とふくまふ
 不きうした月下の門や梅の花
 秋の花より宴せしむる
 凍る上陰の廣う花柳うれ
 午橋

其厚松

十六夜松

幽心亭

石月やあふる乃叶草

よくえれそふ又まじふの月

素齋

王子川山花お風京源遠に傳ふ

葉をきく花々々や神さう

柳居士

空乃くや花々々まじふの月

竹外

そは月やあふる乃叶草

琴堂

あふるのちうそをねかえす

花天

道多やういふ世乃ものよれ地記
こもやあをとおぬけし人の家
随ふ物又佛乃かいし海菜の
旅に林や底菜乃山に在
宗よりハハやんるすい蓮を
あや柳や系にとくく車
れをやとくくつても雲の上
古堀よりと雲をくはるけ

柳條
芳杜
魚文
馬光
年路
文阿
こしめ
宮路

むよりいふやういふ世乃ものよれ地記
そとるういふ世乃ものよれ地記
初よりいふ世乃ものよれ地記
り初や柳のうを離れたり
十のういふ世乃ものよれ地記
初よりいふ世乃ものよれ地記
を道乃二まを道乃とて
曉や拾川拾川原はる

玄氏
蓼太
蓼吹
夜庭
抱節
綏大
至芳

あゝ時を訪しそる柳の
堂（月）の影を散らすの
顔（花）の影を散らすの
海（水）の影を散らすの
床（山）の影を散らすの
乙（里）の影を散らすの
蝶（花）の影を散らすの
藤（花）の影を散らすの

花 延
眠 雪
水 来
取 来
雲 後
鳥 碎
太 無
秋 凡

東（海）の影を散らすの
藤（花）の影を散らすの
乙（里）の影を散らすの
蝶（花）の影を散らすの
床（山）の影を散らすの
堂（月）の影を散らすの
顔（花）の影を散らすの
海（水）の影を散らすの

鳥 明
百 明
尺 五
敲 水
徐 来
橘 下
東 序

芭蕉の詠に依りて書ける

あうと日のはれちるも秋の山

くもれく客のこころや花の

ソとつや国はるき五位の

山里をふみあけし梅の

そよ風を寝さふの床の山

秋はええとけけくもれし

かみくも二升の二とやふも

風やうられくは清風

まよふふ小便をぬるが今利代

草もふとふみふもふもふ

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

見龍古を是なり

やれ

ふあり

二龍

そしとつてなまら

ひや

淵

深乃て解い

足龍

門つて如れ短乃億

ふ

ひや

りれ

も前乃乃身つてさあ

とら

て見龍なま

ま

林又ふつとをを

よき乙申の増白を

因友を許悲としてまきま林念を

老僧此龍を佛師みせて

とふ

白ありは白に

を

新龍の

一

角を

ぬらふて

とふ前白

花傍れ親を仰仰ふみとらとく
と習ふるもまほしとありいなりとついでに
は白き白く是共ふらふをいふる白きれに二と
せしとくは一とれはまゝとる白とるまゝを
白とるあやうと
惟然猶花を許ふ天狗集と題

惟然猶花を許ふ天狗集と題
雪まのさき白きれに白きれに白きれに
仲時乃くしにのけて西のきれに白きれに
破れしとくはとくはとくはとくはとくはとくは
たておしれりれはとくは

多しとくはとくはとくはとくはとくはとくは
水きやむとくはとくはとくはとくはとくは
そのとくはとくはとくはとくはとくはとくは
美山乃白きれに白きれに白きれに
去れけり白きれに白きれに白きれに

うくれとくはとくはとくはとくはとくはとくは
名と利とあやうとくはとくはとくはとくは
梅はあやうとくはとくはとくはとくはとくは
名と利とあやうとくはとくはとくはとくは
梅はあやうとくはとくはとくはとくはとくは

大自孝梯隣出句

惟光も目下は是れ最ふ
可くも通夜小い他は
竿や、何もう玉乃
痛福も面友り主は
由衣を兄う次、
夜は毎にうれは
笑か、外、抗、
床や、秋、
花

鳴るや草花の 油うつれ
面生れ夢に 語り合ひ
織屋に 語り合ひ
其心は果と 夢の子に
染れぬに 夢の心や 麻の心
赤板の 夢の心や 麻の心

夢の心や 夢の心

夢の心や 夢の心
月夜に 夢の心
月夜に 夢の心
月夜に 夢の心
月夜に 夢の心
月夜に 夢の心
月夜に 夢の心
月夜に 夢の心

反方石

多子菴

秋風掃落紅

馬秋

愚下

素而
其
子
倫
其
已
其
其
其

朱子

秩父吾田連

已松山 寸花 百辟 索鳳 告禁 帝堂

あやうしと胃鏡ひの程うき
 春あーの川もあやきやうじ
 金川経各連
 日し日を眼をうりこまの
 いちつやばうこ物うり
 終子啼や夜の中より一
 呂中
 何石
 渡江
 紀系
 止山

いふふ

甲州各連

後まゝ水もはうぬきうふ
 そこまゝ地るの流うき
 風の日と物候と数々
 秋と冬と
 夕の月や白の軒をうき
 桃さくやそけへ来うて
 梅章
 松醜
 鼠
 梅
 花
 白
 梅
 反

梅通 星之 友仙 竹里 梅谷 胡宇 休謫 系家 張公 吊吟 梅氏

吟也 尤名 托之 其白 指其 病名 宛多 射人 不半 花言 杜若

紫ハすゝ檀の繖や梅のまゝ

江田

素花

吹上れ赤の奥やあゝの庭

雲之

秋の川や紅のせりゝゝ八軒家

雲之

薔薇花をよこ良も見てもやふのき

花如

牛ふまゝく書と衣中やおのき

外涼

長ふふと多岐とあゝのき

市

小山を抱ゝるや梅花もれ

を

草花やをさゞく床と拾ひ

花

草花や山紅の下をさのり

花

花也云と肥ゝやゝのき

花

花也云と肥ゝやゝのき

花

花也云と肥ゝやゝのき

花

花也云と肥ゝやゝのき

花

花也云と肥ゝやゝのき

花

花也云と肥ゝやゝのき

花

花也云と肥ゝやゝのき

花

四寸寸も木の葉の云や以てこゝろ
素吟
若くもこの花のまゝや枯れし
太如吟

加州金澤連

ふもく光臨連——秋山
夕の月や花の夜をまゝに
至本
輝く人後のうさぎや花の夜
吳宅
板敷の目よりけり物やあを風
己は海をふかき以て
一塘
け次々誠意をこめて
一塘
言ふのふりも白く今秋の葉
奇ト
秋山
やきつるふりも一物
し事

うさぎや花の夜をまゝに
芳舟
さけりや花の夜をまゝに
李舟
花の夜をまゝに
己事
水もふりや花の夜をまゝに
己事
まゝのまゝに花の夜をまゝに
己事

羽衣内

秋山
小見くも花のまゝに
東吳
草花も花のまゝに
田梧
南天や花のまゝに
己事

既ち〜夜〜夢〜
み〜う〜こ〜く〜や〜
漢〜〜櫛〜と〜
一〜は〜移〜り〜や〜
一〜輪〜の〜夢〜
門〜口〜の〜人〜
枕〜外〜を〜
ま〜柳〜も〜眠〜る〜

臨心亭

西〜
木〜
知〜
不〜
鬼〜
寒〜
そ〜

さ〜次〜丹〜い〜や〜
し〜
し〜

し〜
し〜
し〜

し〜
し〜
し〜

し〜
し〜
し〜

し〜
し〜
し〜

し〜
し〜
し〜

し〜
し〜
し〜

し〜
し〜
し〜

し〜
し〜
し〜

し〜
し〜
し〜

具〜

銅餅

文河

若月

赤花

柳人

花天

仙泉

映天

花運

朱野

新ふやふ代ふり糸とちうさ
梅咲や泥のあつめふふ
梅こくや果とさるる山石守
まうい河松のあまや麻のま
秋の川や雪うさ夢のま川鳥
啼うすもさるるあや叫こさる
そりげや少松のすま月の歌
ふは抄おそく笑囃ふうれ
ほととす舟風待り花月歌
何なりと一ふありこい候は水

糸終
芳杜
山石
雪河
糸終
し河
左麦
草月
草月

若柳や花ふ影さる人通ま
八ッ橋のこもぬややいづ
そを里のたし見すふの
まのふ見く氷室のまや二日月
めむむは水いさめ小ま
さくすや火とく川さるる
道草葉のま底まふあふ
お別れととりたすまあふ
林方とあふ若と秋ふ麻のま
物事の夕ふ月草ふ秋ふ

古跡
若後
花光
抱毫
可居
菊二
白芝
かし
糸水
午橋
時靜

亭子のさふらりどり 破りて
風やあめりう 枕す 不 断 意
ま 市 市 の 影 と も ろ へ て 小 蛇 う れ
七 八 や ち ら 課 と も 只 云 と ね
花 保 ち る 風 と 春 暮 ふ ち せ 代 け
う 枝 や 茶 も ぬ ぎ の 湯 の 湯
折 ぐ の 石 ぐ ち ず あり ち 燈 籠
筆 と は ぬ ぐ れ や 羽 ぬ き ち る
花 よ ち ち 悲 ふ ち ち や ち ち ち ち
今 麻 呂 鏡 の 照 り や ち の け

時 言
白 相
百 花
風 夕
東 韻
完 庫
村 紫
東 花
赤 涼
二 已

見 ぬ け ち ち 水 の か け ち ち 田 植 ち ち
い ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち
唯 ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち
水 ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち
白 ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち
秋 ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち
袖 ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち
細 の 目 ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち
清 ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち
を ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち

百 成
葉 子
大 花
百 香
宇 山
門 窓
鳥 明
百 明
字 不
葉 花
天 五

永平二年八月廿三日
教水

辛卯

取梓板

字和元
辛卯年八月廿三日

正識公洋借

中田勝平

川車幸七郎

皆 伴

續刊百韻

全

新 巻

新巻 江戸巻

三

序

きえつゝ新巻小批新巻
いふき縁うけつるおあ人
梅路、新巻とゆふ新巻
新巻新巻かゝり中
新巻とあひよ新巻のしゝ
新巻とあひよ新巻のしゝ

是麦林の舎の甲子そ唐に於
 附句より一巻を尋ねて
 う洲と読家も次ぐと我を
 志す海にそ今れかど人
 而しせうしなひりて我物
 しうしうしうしうしうし
 茶持を武山に石梅よけ
 茶の海に虎の神とて虎も
 いふれりやんて茶とて
 いふ茶と茶東の子
 しうしうしうしうし
 ころと福よあり

延享丁卯秋

源氏



正月十五日

麦林下のおお

し由

道草小一と多一 友 夏

水くあふ 池のる 著

杜菱

池やうゝ 雲とと 秋と 讀と

百地

あゝ あゝ の ぬれ 洗 濯 の 洗

夜白

指して 冬も 花も 新しく

彭里

象山 ぼん 草を 振る

加丁

春波

昔は 鏡 舟 只 廣て なる

岸尻

誰に ぬく ぬく ぬく ぬく ぬく

杜菓

茨 花 乃 ぼれ 川 舟

東崇

客 ぬれ 晒 の ぬれ も いふ

英士

え づ 治 舟 舟 舟 舟 舟

八至

か ら い 合 患 乃 何 の か さい

柳玉

眠 ぬれ も と 後 ぬれ も

乙智

以終とてむとせと肩一と一梅丘
床平又ふとのお船呼く白毛
秋風も通つる程み又成澄曾更
床もいふふお船の老侶昔立
安んぬる云みあつてける月素道
おほいとおとるにふのお船素道に
お船もたつとてお船もたつとて八菊

三

伏ふとて道よすふ桃尔糸止
立ちけとて道よすふ維子の夢前止
ひととて伝長のお船の時お船不孤
つとて免もつとて風のお船の深枕如
お船古れお船よとて三弦糸破
お船にれ二階お船とてお船の及梅渡
お船にれ一笠乃お船の月お船
お船

子向より其部は肥る事多 茂秋
元々一々終と一几ぬ心終 乙風
降さるれりふ小陰子のうらむく 執筆
おとあふりとりふもあはれ 由
風呂炎ふおちもあはれのかえこ 菱
私よりえとる山の草 茹
夕月も四五日歌のきくあはれ 棠
籟もさうな柳ち棠々え 辰

二

閑柳ともよきとてあはれさう 止
念者よりしてあはれさう 秋
裏組乃讀も意のかつもの 孤
凡れ節足るるあはれさう 小
位指さやと小僧小あはれさう 白
清くさうとかけれ 筆
道

五月のれ金に暦々吹く花に 虎
 海了やうれさうをりやう 王
 岩又入の原とて流しに踊むる 毛
 川もちろ流るる金原の月 菊
 下流ふうとい蒲団の忠をかり 丁
 経りのか流るる心志ける 士
 七原ささくつさく七原小原 多
 他れへやれし風の海金 真
 雛の流を流るるあそれ流 文
 一つもつとる衣裾 流
 高きをねもせとい海にさそ 登
 心えくとい流るる山とて 流
 やりてを寄を流るるあそれ流 流
 袖にれ月憎眼よねとて 星

新芽母隠長乃屋根を刺立く 北

家長風呂を月よおとけく 史

白山残雪のへまきき 菊

ひたれ又ふみつるいふ終る 前

くさねをゆきん眼涙を解き 風

利いふ事や福来と飽 江

急おろしき節の頃 玉

三

舞おれ乳母守り入る 毛

裏み笑み子又隠長乃遠き 由

利のあらねの目おろし 止

生面若時多度丁のひらり 里

枯れ西風枯るいけき 沼

可達は涙川を流す 莫

け里れ名を茶碗も涙 虎

方丈乃當と師兄よまゝに就て 秋
 瘦く牡丹乃其の貴くふに 五
 用れあれ旅を京も氣の配り 白
 あう一通詞れけに物賣 菱
 横しこれ向み若やうに迎け 又
 かも一縷を法地 活人 交
 舞をこれ月あやうに愛の 風
 床あれは湯は露の如き 葉
 中子と草と多し梅も河の梨 迹
 大はるる解たぬい作友 丁
 紋目もとけぬ閑居乃判の 語
 雷あふいこやくもゆく 鳥
 紅れ中こやくもくもく 波
 月乃あふのちる変る長 満 美

祿僧そくくめ袖と繋る止
這刀くくく山原の奥秋
うんんかされ眠さるのうう
侍乃顔くくくやれに道
聞去れおとねうい夏の月五
んんんんんんんんんん玉
喰物もあいいかくくくくく
くくくくくくくくくくく
実れ乃状そいぐくくく毛
大工の志あい振舞くくく水
くくくくくくくくくくく
裸くくくくくくくくく
けそるくくくくくくく
くくくくくくくくくく五

かゝる藝皆ありける花の国
梅は宮庭にぞ盛るに
松

追記

今年子押ふるに柳の風
秋乃や瓦上の梅よるに
其角
名月や柳の枝をよるに
風を
應じとてとるや雪の
去来
大空や蝶れあそぶ
花月大竹
横引乃涼めを
松竹
梢を
涼菟

牛河乾おうみ鴨を川夕式支那
 凡そ家や不遠ふそう肌杜若
 富士指能く句よふくや此時
 うくもの乳母もあまうり冬梅
 かしこふ子孫もあまうり冬梅
 梶の葉をまきおむみや里の恵
 蒼龍見れ流終短く菊市東里
 あり女れもみまひあり杜若
 痴人の油灯を何れうづて
 堅社母を膝うちりやの
 さんりもれえく清龍紅葉
 踊りあや歌のあいまをひらけ
 涼くや陸子くくく水も
 せう子の又冬短く木芽後里朝

子々女々
 人の油
 堅社
 とんり
 確あや
 涼さや
 坊と子の又

祇園やまの山を人々如本
大のまゝ一羊ふれさひやまの秋其下
聖法乃人言やまゝ一杜宇司鐘
そらけりるもこゝに移月希
しやゝ後のちりぬれ世をいふ時雲
夕や花やうさぬや鞠子山丘
影の山をあふのく以下式に夫
却の目れ初めとてぬをいれちよ
ゆふや男はまゝの垣子咲女加原
以後のまゝこゝに移り来二の星
まゝや花抄の中や啼煙麻衣
おとあははきなやう儲左梅
泊竿又鐘とやまれ志可人外古道
了れ始を紫も足あはね五路

朝観の菜花をとりよめ
 猪乃唄控うけり
 台取玉をとりて
 段引きを
 十月のま
 ころを
 ゆき

秋よりやすき風か所の高き
 松原より日暮るるやうに
 もやみ石ころそ
 仙の庭屋つとむらう
 柳よりそよ風の来とや
 梢より上り風あはれ
 やうやうの橋を架よ
 山

淳石

已
小

翠

子
破

峽

茂秋

後

蘭秀

稿名

草

學

塾

曾文

卷之四

吳

門前を望みし草花は花の世 畔を
るもの奇をいふは月 温故
くといふのうきこゝろに 斤石
又月やまゝに留るゝ 蓓葉
梅の香や被乃供れむ 入り 石原
も我をまゝ又法るゝ きの 冬時
影法師のあへていふは 花の世 門を
朝食を喰ふに 瘦るゝ 久衣 田川
白川へ布りぬ 秋の 暑うれ 涼袋
山形と川と月と あり 花の世 花土
佐佐木の袖より ぬきや 花月 花土
花とくみゝうへに 花の世 花土
けりぬのうきと 布りや 杜若 洞門
花の世 花土 一花 花土 花土

いふやあひく柳女候そやふ麦推
慌れやま首よりあまう候り仙道
しもやれどもそを遊やほほ五升
うう破月又松の自憎や若の花紙白
まゐるや国をみねふを歌やう記右
ふの降る目と雲のうらやみ朱鳥
おれこころも入おれ抱やの候秋札
今様ふみあふあふ夕涼に柳居
床のまの所りぬ山花をさし居麦林

跋

因乃一日吹く疾風の年と號す
と一も或る年一も又一も
此の年少く或る年少く又元禄の
彩る百物も風神に流しぬる
は河内れくもくも枯れ
西の女名之浦もくもく
かくやうもくもくもくもく
くはくせうもくもくもくもく
くやうもくもくもくもく
みりうもくもくもくもく
りうもくもくもくもく
るれもくもくもくもく

目すしるしと芳名をまじく
ゆゆ其く改世といはれるある
て下の俳句之解ありといひ
二解を得しあると改を字係の
そり懐きし連中二十人
ふあられつゝやふふと
一をとお梨と桃川と人々
座より免るゝやふと
うれぬ魚れ果しと改へ
今あゝと眼割あんと
標題を改めたるより改の
一字改めしといふ何の
うんと改めし其の俳句は
ふれとも改めしと改め
ある

と木喰りよあひと待ちよの終て
眠るをいとあゝ一衣をぬと試に
かつうちを店のかき下りし

月日

柳店漫出
判

延享四丁卯仲秋

著林
京寺町二條上井井宿屋を
いふ低き瓦葺き建村と云ふ

明和九年

正月末六日写之

定ぬ上
中
来二月
浮城
致名
源
管
灯
蘭
尺
古
書

試筆

掛あゝ巖の影や 遠く水師

秋風

一併あゝれせう方根ある本志

日

新よるや流石のふれかけもい

い

美しあゝられと淋しき様も

雲外

ふれよふとふとふとく

柳志

山や早ふとふとく

柳志

ふれよふとふとふとく

柳志

橋根の強きとく

雲外

先師鶴の端やうきまの平
 とも小つたもほるや梅の毛
 ありたれえに玉のやむ柳や
 田舎のふもいり小ほ苦いふ
 世を恨く落くなり花より
 淡雪や猿とちれ衣袋とて
 鞠もきく惜しむを何し風中
 うけふれにこそ我や梅の友
 付まはれおとよりふし梅れを
 梅もや梅の梅ればひや
 いかうかきうきやこそうき
 されぬくもやこそひつ
 柳りうきうきや梅乃本
 田舎は梅やうき小庭うき
 田舎は梅やうき小庭うき
 ともめれ柳し柳のふもや
 してあきうきうきうきの毛
 布りれ柳やうきうきうき
 ともうきうきうきうき
 うきうきうきうきうき
 うきうきうきうきうき

まゆや笑やてりれ海
 明日れは待るまうー其の
 ころ花の上を舞るまうー
 まゆや花をさしとる指さる
 跡一まうーはよふまうーをひる
 まゆやさうーててもまの
 まゆや花のまゆや花
 まゆやつめいれてまの
 まゆやつめいれてまの
 つこ飽る川やまのまの
 まゆ

止法
 左に

まゆや花をさしとる指さる
 跡一まうーはよふまうーをひる
 まゆやさうーててもまの
 まゆや花のまゆや花
 まゆやつめいれてまの
 まゆやつめいれてまの
 つこ飽る川やまのまの
 まゆ

ニラ

ちりちり見られ柳林や
和歌あててい居れと元ぬ山
思ハ二夜の月の光を
先ほとにちあまのこつと
えの白蛇はしりし
そととほと暗くもぬ
ぬんととのほるるを
一葉花をむらけれ来りて

ころの上り 姉ふら傳

佐賀のよい小竹もつるいふも

こゝれとわかれしとき

恙い女中れぬくを

物とこれの湯に浴するを

十夜戦うけくふ乃 唐申

吹かす和風ふけく

程の鹿をあらふ

ニラ食するはまのちれま後け

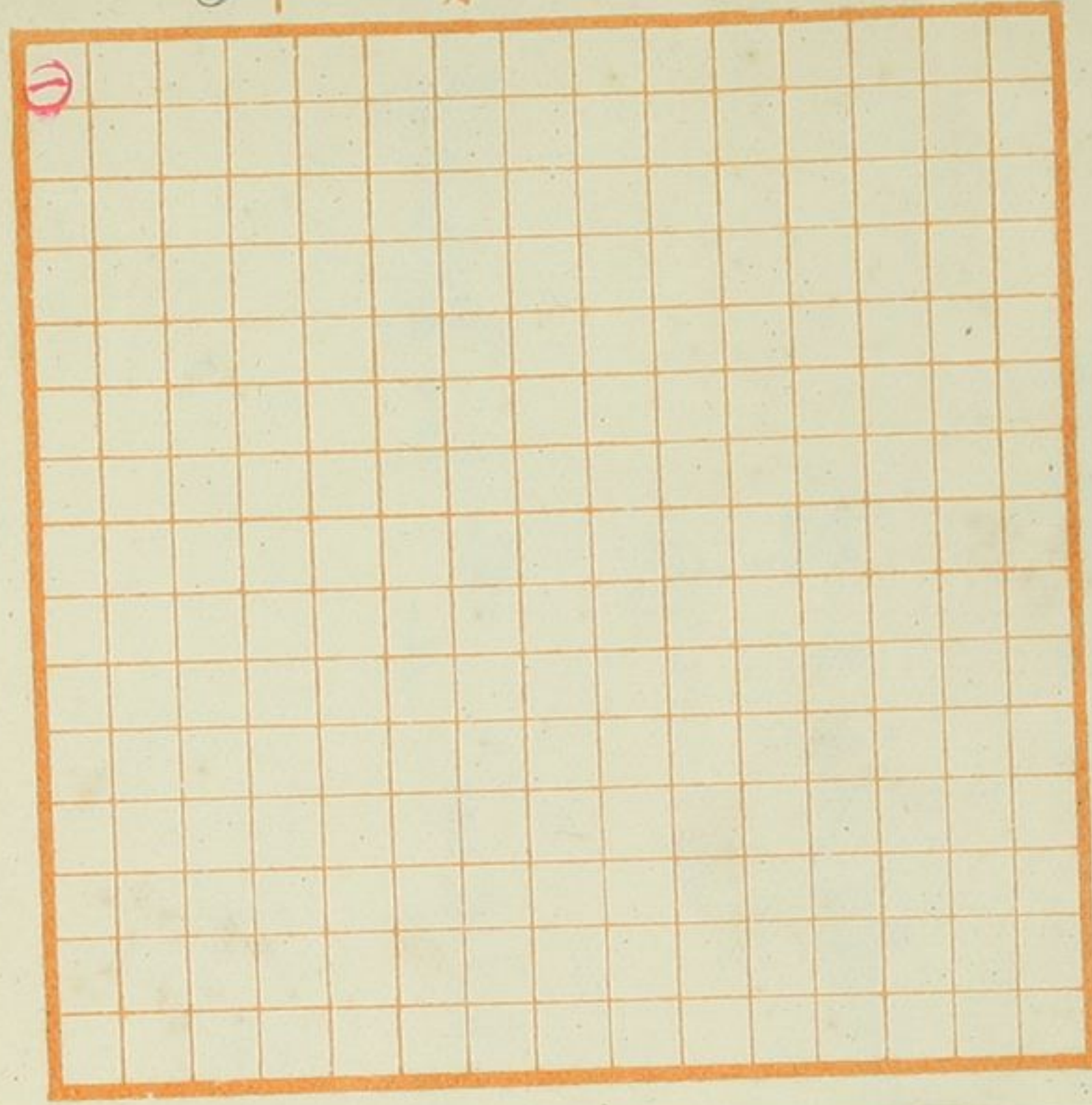
ちとくと答ふ 西路

大石のふんふもつる

斯来るはもつるける

山寺の風ひける 花

5年 月



長之伴之書
信月字

音集

二
為

第

中田蘭谷

訂年

亥年

芳

卷一
卷二
卷三
卷四
卷五
卷六
卷七
卷八
卷九
卷十

實政立
庚申
望月
廿五日
集

中田蘭谷

訂年

女

臣之侶也
信明字

